令和6年度 研究の概要

福井市中藤小学校

1 研究主題

一人一人が輝き、共に学び合う
～子どもの主体性を育むための授業づくり～

2 研究主題設定の理由

文部科学省、中教審答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』(R3.3.30 更新)では、「新学習指導要領の着実な実施」「GIGAスクール構想の実現」「学校における働き方改革の推進」などが掲げられ、取り組むべき課題が多くある。本校も例外ではなく、新学習指導要領に準じた「主体的・対話的で深い学び」の実現へ向けた取組や一人一台のタブレットの活用、教員の働き方改革を日々実践している所である。

本校は今まで「聴く」「話す」を中心に添えて研究に取り組んできており、学習指導要領と重なる部分も多くある。児童が「主体的」「対話的」に学ぶ手立てとして、「課題・場の設定(授業のデザイン力)」「教師の姿勢(ファシリテート力)」「自己との対話、他者との対話(なかふじの『聴く』『話す』)」を柱として研究の推進を行ってきた。その中で、児童自身が「聴く」「話す」の意味や価値を少しずつだか感じることができるようになってきている。教師が「聴く」「話す」を意識した授業づくりをすること、そして、児童自身が学びや生活の場面で「聴く」「話す」ことを活用しながら、その有用性を感じるという相互の作用により、対話の素地がつくられてきたと言える。

本校はこれまで、昨年の全国小学校道徳教育研究大会に向けて、道徳科の授業研究、道徳教育の充実を図ってきた。これまでの研究の成果や課題を教職員でまとめたところ、成果として「様々な手立てをとる中で、自分の思いを表現することに児童が慣れてきた。」「お互いに認め合うことが、クラスによっては不十分であり、一人一人の学習意欲を高める必要がある。」などが挙げられた。これらの結果を踏まえ、課題として挙げられていることを改善するためには、まずは児童一人一人の主体的な学びを追究することが重要であると考え。そうすることで、児童の基礎学力や自己肯定感が高まり、ひいては「互いに認め合うこと」につながっていくと考える。

本校は大規模校で教職員の入れ替わりも多く、若手の教員の割合も高い。その中で全教職員が協働して研究に取り組めるような組織づくりをしてきた。今年度は、本校が培ってきた中藤の「聴く」「話す」の指導を継続しつつ、教科・領域を問わずに、児童一人一人の主体的な学びを追究していきたいと考えている。研究体制としては、学年内で協働し、全ての教員が授業を見合うことで、学校全体の授業力を高められるよう努めている。また、日常的にも授業についての話が自然とされるようになってきており、教員の向上心の高まりも見てとることができる。

中教審答申において「教育を通じて、解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解ける力を育むだけでは不十分である。これからの子供たちには、～(中略)～高い志と意欲をもって、蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協力しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。」と述べられているとおり、学校生活のあらゆる場面で主体的・協働的に課題と関わろうとする心の成長を促したい。そのためにも、まずは「一人一人が輝く」ことを第一に目指し、その上で各教科や生活の中で「共に学び合う」関係をつくっていきたいと考え、研究主題を「一人一人が輝き、共に学び合う」に設定した。

3 研究の内容(学校全体の研究)

(1) 研究主題のとらえ方

「一人一人が輝く」とは

- ・一人一人が大切にされていると感じること。
- ・学ぶ楽しさや喜びを感じ、自ら学ぼうとすること。
- ・達成感や成就感を感じ、次につなげようとする。
- ・自分の表現したことが、集団の中で価値あることとして認められ、もてる力をさらに発揮していこうとすること。

「共に学び合う」とは

- ・他者とのかかわりを楽しいと感じ、かかわり合うことの価値に気付くこと。

(2) 研究の3つの柱

研究の柱① 授業のデザイン力

「主体的に学ぶ子どもの姿」をまとめたものとして、文科省からは5つの姿が挙げられている。

- ・「学習への興味関心をもっている姿」
- ・「各教材のゴールや見通しをもっている姿」
- ・「既習知識や実生活など、自分と関連させている姿」
- ・「課題に対して粘り強く取り組んでいる姿」
- ・「学んだことを振り返り、次につなげようとしている姿」の5つである。

これらの子どもの姿が見られるよう、教師は授業構成を工夫する必要がある。例えば、子どもに興味関心をもたせるために、課題設定を工夫することが挙げられる。教師が「探究」「目的意識」「必然性」「意外性」「当事者性」「多様性」「対立」「自己有用感」を意識して、あらゆる場面に応じた課題の設定を工夫することで、子どもの学ぶ意欲を駆り立てられるだろう。

また単元の最初に、教材のゴールを示し、その有用性を知らせることで、子どもは受け身に課題をこなす時よりも積極的に取り組めるようになる可能性もある。

さらに、子どもの関心のある事柄や身近な例と学びを結びつけたり、これまでの学びを振り返らせて既習事項との関連や教材とのつながりを知らせたりすることで、さらなる学習意欲を高めることもできると思う。

これらの、単元全体を見通した授業のデザイン力を教師が意識することで、子どもの主体性を育てていきたい。

研究の柱② 教師の姿勢(授業の対応力)

まずは、教師自身が第一の聴き手となり、子どものよいモデルとなっていきたい。その上で、子どもの思考を深めるために、どのように子どもの現状を見取り、声かけをし、働きかけ、価値づけていくのかという、教師の姿勢・授業中の対応力を高めていきたい。

例えば、つまづいている子どもに対して、教師がどのように見取ってかかると、子どもが学びに対して主体的になったり学びを深めたりするのを考えることが挙げられる。他には、全体指導の際に、適宜子ども同士の発言をつないだり、問い返したりしてファシリテートしていくことも挙げられるだろう。あらゆる場面で子どもの現状をつぶさに見取り、働きかけ、価値付けていくことが、教師として大切になってくると思うので、その点を研究の柱の一つとしたい。

「教師の姿勢(授業の対応力)」を育てていくためには、日々の授業からの意識付けが大切になる。しかし、日々の中で忙殺されてしまうのも現実である。個々の技量に任せるのではなく、教師集団として協働することが必要になってくる。授業や子どもとのかかわりを気軽に見合い、フィードバックし学び合うための場を今までも本校の研究として取り組んできた。本年度も、全教員が互いに授業を見合い、授業力の向上、教師の姿勢の高め合いを行っていきたい。

研究の柱③ 協働の場づくり

子どもの主体性を育み、深い学びを実現するために、他者と協働する場づくりを意識していきたい。例えば授業の中で、ペア・トリオ・グループを意識的に設定するなどが挙げられる。ただ「ペア」「グループ」ありきの授業構成ではなく、教師自身がその目的をしっかりと捉えながら「話し合う場を保障するために」「自信をつけさせるために」など意図的に行うことでより効果的になると考えている。他にも、ホワイトボード・付箋・思考ツールなどを活用して思考の可視化を図っていき、互いの考えを共有しやすくしていく。そして、何よりも児童が、安心して自分の考えを話すことができる温かい雰囲気づくりを行いたい。

対話に関して言えば、本校ではこれまで、『なかふじの「聴く」「話す」』と称して、系統的にその基盤を整えてきた。「対話する」土台として大切なことは、「ことば」をしっかりと意識することである。一般的に言われる語彙力を高める指導は国語科を中心に、各教科の指導事項をしっかりと押さえることが大切である。これを「学ぶ対象のことば」とすると、対話力を育む上で大切なことは「学びを媒介することば」の成熟だと考えた。低学年は話形を指導する必要があるが、6年生になっても話形に頼っているようでは対話的とは言えない。自分の考えをもち、発信し、応答し合う関係を作るために、『なかふじの「聴く」「話す」』も継続して指導していきたい。